大沢在昌さんとの読書会　実施レポート

1 月 27 日、紀伊國屋書店 新宿本店で大沢在昌さんとの読書会が開催されました。本好きの方のための総合読書サイト「WEB 本の雑誌」と協力し、昨年から行っている「Reader」を使った読書会。今回からは、Reader Store 優待プログラムの感謝企画として、Reader Store 会員の方々を抽選で招待し実施しました。

まず、冒頭では、進行役のブックディレクター・幅允孝さんが、イベントの趣旨について説明しました。

「インターネットを使えば作品についていくらでも意見を述べられる時代になりました。しかし、せっかくの感想もネット上に流すだけでなく、同じ作品を読んだ読者同士が意見交換する機会や、直接作家さんに思いをぶつけられるチャンスがあっても良いのではないでしょうか。言いっぱなしの感想がネット上を浮遊している状態よりは、こうして自分の思っていることを書いている人にぶつけてみることで、読書というものがこれから変わっていくのではないかという思いからこのイベントは企画されました」

続いて大沢さんが、課題図書『鮫島の貌 新宿鮫短編集』の中の一作品「幼な馴染み」を解説。同作品は人気コミック『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の主人公・両津勘吉こと「両さん」が登場する異色の作品です。

「『幼な馴染み』は、当時『こち亀』の連載 30 周年を記念し、私が理事長を務めていた日本推理作家協会と何かコラボレーションして小説が出せないかという企画から生まれました」と大沢さん。「新宿鮫」シリーズで『こち亀』を扱う際、苦労した点についてうかがうと、「作中ではあくまで『両さん』のイメージは壊さずに、主人公の鮫島と『両さん』といういかにも絡めづらい二人のキャラクターを、どのように織り交ぜながら物語を進めていくかについて悩みました」

一通り作品に関する紹介が終わると、いよいよ大沢さんによる「幼な馴染み」の朗読へ。登場人物の感情や情景に合わせて声色を変化させる大沢さんの迫力ある朗読に耳を傾ける参加者。「両さん」が登場したシーンまで、たっぷり 10 分ほどを読み終えると、参加者から大きな拍手が沸き起こりました。

続いてのトークセッションでは、作品の登場人物・藪に実在のモデルがいたというエピソードや、大沢さんが作中で「両さん」の特徴でもある粋な男をいかにして表現していたかというネタ明かしが繰り広げられました。また、今回の課題図書『鮫島の貌 新宿鮫短編集』が「新宿鮫」シリーズで出版した初の短編集であることに話が及ぶと、「短編集として執筆した作品は、鮫島のスピンオフ的なエピソードであり、楽屋話のようなもの。しかし、だからこそいつもの長編では見ることのできない鮫島の新たな一面や意外な表情を知ることができるのではないか」と大沢さん。

「新宿鮫」シリーズはこれまで 10 の長編で構成されており、その最新作『絆回廊 新宿鮫Ｘ』は昨年の 4 月まで WEB サイト「ほぼ日刊イトイ新聞」で連載されていました。同サイトは、中心となる読者層が 30 代女性ということもあり、ハードボイルド作家である大沢さんの作品が受けるとは一見思えないかもしれません。しかし、連載後、読者からは多くの感想メールが寄せられたそうです。中には初めて大沢さんの作品を読み、連載中に既刊本をすべて読み尽くしてしまう程ファンになったという読者もいたといいます。

「『新宿鮫』シリーズのようなハードボイルド小説は、一般的に女性の読み物ではないと思われています。そうした先入観があってか実際に書店で手に取ることも少ないでしょう。しかし WEB サイトで、しかも無料で読むことができるとなると意外とハードボイルド小説も面白いものだと感じてもらえたのではないでしょうか。作品の窓口を紙の本一つに絞らずに、新たなメディアでも展開したことで読者層の拡大に繋がったのだと思います」と大沢さんは分析。

その流れで、参加者から大沢さんに作品についての質問や感想を直接述べるコーナーに移ると、「新宿鮫」シリーズ次期作品の構想や「今後の展開で、主人公の鮫島が死んでしまうこともありえるのか」といったストレートな質問まで上がり、話は大沢さんの死生観へ。

「ミステリーは基本必ず人が死ぬ物語。主人公である鮫島の死も、物語を進めて行く上で必要なのだとしたら考えられない話でもありません。ただし、作中では単なる都合で人を殺すことはしたくない。その登場人物の死によってしか物語を動かすことができない時にだけ、そう書くようにしています」（大沢さん）

大沢さんがシリーズ最新作『絆回廊 新宿鮫Ｘ』を連載中、重要人物である桃井の死というエピソードを執筆していたとき、ちょうど昨年の東日本大震災が起きました。

「あの時はいろいろなことを考えました。現実に多くの方が亡くなられた中で、ある物語の架空の人物一人の死がどれ程読者に響くのだろうか、小説を書き続けて 32 年にして初めてそうした迷いも生まれました。作中での『残された者はただ生き続けないといけないんだ』という桃井の死に対する鮫島の言葉は、震災が自分に書かせたものだったと思います」（大沢さん）

震災が起きた当時、『絆回廊』を連載していた「ほぼ日」には被災者の方々から多数のメールが届いたそうです。中には、「電気が供給されてすぐ、気がついたら『絆回廊』の続きを読んでいた。そうすることで少しでも自分が日常から離れ、心を落ち着けることができた」というものもあり、大沢さんは作家という人間が世の中のために何ができるか、このメールを読んで改めて気がついたといいます。

「小説ができることには限度があります。何か読んでいる人に力を与えようだとか、そうしたおこがましいことができるとは思っていません。ただ、日々の憂さ晴らしくらいにはなるだろうと。私は小説を買ってくれた人が『あっという間に 2 時間過ぎてしまった』『読みふけって気がついたら朝になっていた』という声を聞くことができれば、それで十分満足です」（大沢さん）

トークセッション最後のテーマは「電子書籍」について。普段の執筆活動は手書きながら、自身でも「今日本で一番電子書籍に詳しい作家」と思われている大沢さん。「電子書籍が紙の本のマーケットを独占してしまうのではないか」との声もある昨今、紙の本が売れなくなっている理由は書店に並ぶ本の多さと小売りの流通に問題があると指摘。「一昨年、世に出たタイトルは年間でおよそ 75,000。こんなに大量の本が世の中にあったら、特に目的の本も無くふらりと本屋に立ち寄ったお客さんは一体何を読めばいいのか、自分の今の気分に読みたい本は何なのか分からず、本を買う気になどなれません」（大沢さん）。さらに、書店では本が出版社別に並べてあるため、読みたい作家の作品を探すのに何カ所も棚を移動し手間がかかる点や、書店員の実入りの少なさからプロの書店員が育たず、顧客のニーズにあった本を紹介できる人材がなかなか書店に残らないとう現実に言及し、書店の顧客サービスの低下により、紙の本のマーケットは確実に縮小していくのではないかと話しました。

「作家、出版社、書店など紙の本に携わる人間は多くいますが、電子書籍が普及するしない以前の問題として、今日の『本』に関わる業界は現状の流通や販売のスタイルを改めない限り、日本人が紙の本を買うという習慣はどんどんなくなっていくと思います」（大沢さん）

一方で、電子書籍には本そのものの市場を拡大する可能性を持っているといい、同じ作品が紙と電子版の二つで販売されたとしても、互いの顧客を奪うことになるとは考えにくく、むしろ電子書籍が本の業界に参入することで家にいながら欲しい作品を手にすることができるようになれば、本自体をどのような形であれ購入する人は増えるのではないかと語りました。

「電子書籍が普及することは本の業界には間違いなくプラスになると思います。だからこそ電子書籍の売り上げが版元と著者に入った時、その儲けをどう紙の本屋や印刷会社にまわし本をより普及させればよいか、そのシステムを業界は考える必要があるのではないでしょうか」（大沢さん）

大沢さんは、電子書籍には、日本の出版業界や日本人の本に対する意識を変える可能性が大いにあるのではないかと期待を寄せ、読書会を締めくくりました。